

ちよつと不思議で、不器用なおはなし

中三・野嶋 瑞希

いつも笑顔でみんなに信頼されていて、クラスをまとめるリーダー的存在。そんな君は、一人になった時にふと表情が陰る時がある。何かに縋る様な、緊張感が張り詰めている様な、何とも言えない顔になるのだ。でもそれも一瞬の事で、すぐに誰かに話しかけられたかと思えばたちまち満面の笑みを浮かべていつものちよつと高い声で応える。僕にはそれが、少し不気味に思えた。

ある時、鎌倉研修の班が君と一緒にになった。君はしつかり者だったから、他のメンバーは課題も安心だと喜んでいたけれど、僕はちよつと不気味な君と一緒にになってむしろ不安を感じた。理由は分からないけれど、何かが起こる予感がしたのだ。

案の定、何かは起こった。

別に大した事ではない。研修中、一人と逸れてしまったのだ。正直先輩からは比較的良くある事だと聞いていたし、先生からもしはぐれた場合の対応の仕方を聞かされていた。それに則って、班長だった君は混雑する小町通りの端っこで、先生に電話をかけた。先生はすぐに出て、自分も探してみるが君たちも小町通りを一通りみてくれ、と言った。

その通りにしようとして僕が歩き出した時、君の表情があゝの陰る瞬間と同じになっている事に気がついた。一つ違ふとすれば、それに加えて一点を見つめて半分パニック状態に陥っている事だった。さつき先生に連絡を取る瞬間までは、そんなはずはなかった。彼女の視

線の先を追うと、そこにはある平和そうな家族がいた。笑顔で談笑しながら、小町通りの奥へと進んでいく。ちょうど僕たちが歩いてきて、今から行こうとしている方向だった。君の異変と、その事実
に班員全員が気付いてしまった瞬間、君はいつもの如く突然笑みを
浮かべて

「よし、じゃあ行こうか」

と言った。

『え』

おそらくあの場にいた、君と僕以外の全員がそう思っただろう。
君の普段人に見せない姿に戸惑ったのだろう。でも自分がフリーズ
していた事にすら気がついていないらしい君は、逆に

「え」

と声を発した。

「はやく行こうよ」

「え、あ、うん、そうだね」

誰だったかが言っただけで、そのままその時は流れた。でもその日の夜、
噂は流れ出した。初めは「なんかあの人ちよっとやばいらしいよ」とい
うもので、だんだん色々誇張表現が含まれる様になっていき、
なぜだか宿泊研修が終わる頃にはそれまでと一転、クラスのリーダ
ーから腫れ物扱いされる様になっていた。教師たちはそんな状況が
無視して、それまで散々「頼りにしているよ」だの「いつもありが
とう」だの言っていたのが嘘の様に、君に話しかけなくなった。そ
んな状況になっても、君はどこか毅然とした態度をとっていた。た
だ、それまではなかった緊張感が感じられる様になった。

僕は君が心配になった。普通、この様な状況になってそんな態度
を取ってられる訳がない。なのに、君はいつもとあまり変わらな

かった。課題などでどうしても話さないといけない時にそっけなく接せられても、君はいつもと全く同じ笑顔だった。それが余計に不気味で、心配になった。

だから、僕は君に話しかけてみた。それまで君と僕の関係はただの宿泊研修が同じ班だった、という程度で、全く個人的な繋がりはなかった。

「ねえ、大丈夫なの」

でも口下手な僕は、だんだんと仲良くなっていく事などでできず、君にそうストレートに問う事しかできなかった。

君はちよっと困った様な笑みを浮かべて、

「何が」

と聞いた。

「え、何がって、君が」

そうしたら君は、初めて笑顔と陰っている二つの表情以外の感情を見せた。顔を歪めた。辛そうだった。

「私がって、大丈夫だけど」

明らかに大丈夫じゃないのに笑顔を浮かべる君をみて、僕はなぜか少し状況を理解してしまった。きっと君は、その笑顔という仮面をつける事で、ずっと何かに耐えていたんだ。

「そっか」

でもそんな曖昧な事も伝えられず、当然と言えば当然なのだが「大丈夫」と言われてしまえば、口下手な僕はもうそれ以上どうやって会話を続けたら良いのか分からない。結局こんな感じで僕たちの会話は終了した。そのまま、その年度は終了した。四月に入り、クラス替えが行われた。君と僕は、また同じクラスになった。昨年度の噂はなかったかの様に、君はまたリーダーとして復活した。また、

笑顔を見せる様になった。

結局不甲斐ない僕は心配しながらも君にまた話しかける事はなかった。そのままその新しいクラス替えも終了して、君とはそれ以来会っていない。でもこうして君の事を時々思い出す事がある。何かに耐える様に笑みを浮かべる人間は、年を追うごとに増えていった。君はきつと、周りよりも少しだけ成長が早かった。そして人並みに不器用で、その表情を隠す事ができなかった。そのせいであんな変な扱いを受けて、でもそれも不器用な笑顔で全部消して、全部なかった事にした。

僕は君が分からない。今、こうして大人になって考えてみても、どうして君があんな表情をする事になったのか、過去に何があったのかなんて、分からない。

でも、一つだけ言える事は。

きっと僕は君よりも全然不器用で、君よりも何もわかっていなくて、きっと君の事が、好きだった。
